

原 著

話すこと動くことができない患者のスピリチュアルペイン —経験世界への現象学的アプローチ—

佐藤泰子 *

Spiritual pain of a patient unable to speak and move : Phenomenological approach to an experience-based world

Yasuko SATO

Abstract

This study aimed to clarify the spiritual pain and experience of a patient who had become unable to speak due to tracheostomy and was unable to move.

The study subject was a patient receiving home-based care who had become unable to speak due to tracheostomy, and was unable to move due to a brain infarction and tumors. Data collection and analyses were performed using a case-study approach.

As a result, the statements that the patient made using a communication board indicated spiritual pain, and the fact that the rehabilitation led him to re-discovery of the meaning of his life. In addition, we suggest that interaction using a communication board was so important in that it helped clarify the fragmentary ideas of the patient, who had not shared his thoughts with other peoples for approximately five years.

The results of our study indicate that an individual can re-discover the meaning of life by taking appropriate action, and rehabilitation serves as spiritual care for him.

Key Words: Utterance impossibility, spiritual pain, experience, phenomenology, rehabilitation

問題と目的

スピリチュアルペインという言葉が終末期医療研究領域で散見される。これは自己の生に価値をみとめられなくなった状態の患者の苦しみを表す。村田(2005)はスピリチュアルペインを「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛」と定義しており、スピリチュアルケアは、傾聴によって患者の語りを促し、生きる意味を見出すことをその中心的方法とする。現在、ディグニティセラピー(Chochinov, 2005)、短期回想療法(Ando, 2007)など患者の語りに基づくスピリチュアルケアが知られている。しかし、語ることができず動くことも

できない患者の抱える苦しみは、傾聴など会話でできることが前提となっているケアではその対象となりにくい。語ることができない患者の苦しみは、閉塞された断片的な表象として主体のなかで意味の繋がりのない混沌としたものであろうことは容易に推察される。また回復の見込みがなく語ることができないままの状態が固定している患者の多くは、治療の対象ではなく在宅で現状維持目的のリハビリテーションの対象となる。治療による回復を目指す状態であれば患者はリハビリテーションに「今を生きる意味」を見出せるであろうが、身体的回復ではなく現状維持を目的とした在宅ケア

* 京都大学大学院人間・環境学研究科 (Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University)
受領 2016.8.23 受理 2017.9.29

は、患者が「今を生きる意味」を見出すこと、すなわちスピリチュアルケアとして患者に寄与できるだろうか。さらに語ることができず他者との言語的コミュニケーションが閉ざされた患者の経験世界を、どのように理解したらいいのであろうか。

本研究では、脳梗塞と脳腫瘍のため自力で動くことができなくなり、さらに気管切開によって話すことができなくなった患者の文字盤での語りから、患者のスピリチュアルペイン、経験世界および在宅リハビリテーションのスピリチュアルケアとしての役割について現象学的にアプローチする。

方法

方法論的考察

現象学的研究は、「今、ここ」という1回性を生きる実存や実存的出会いそのものがその対象となる。1回性、個別性こそが現象学にとっての重要な意味をもってくる。数量には還元できない個別的な実存的現象は1回性のものであり、その1回性の実存的現象のなかに一般性を求め構造を取り出すことが現象学的研究の目的である。多数例によるエヴィデンスにもとづいた量的研究とは異なる方法論であるが、しばしば量的研究にとっても有意義な示唆を与えることが知られている。

人が普段知らず知らずのうちにに行っている科学的・客観的なものの見方をカッコに入れて、直接的な経験に戻る超越論的還元を行った上で分析者の意識に表れる経験の意味を自由変更する形相的還元によってその変更に通ずる形相(本質)を捉えることが現象学的研究の方法である(松葉, 2011)。したがって得られた知見は、臆見を排除する現象学的還元によって取り出された構造であることから妥当性が担保されると考えられる。本研究では、対象者の言葉のみを切り分けていくのではなく、分析者と対象者との間に起こった経験の文脈を記述し、そこにある生きられた経験を捉

え構造を取り出す。そのために現象の記述を読み込んで全体の文脈を把握したうえで、対象の生きられた経験に対して解釈学的現象学によってアプローチする。

調査協力者

調査協力者は在宅療養中の患者1名、A氏であった。

A氏の病態は次のとおりである。本調査の5年前、脳梗塞と脳腫瘍によって右半身麻痺となり、自力で体を起こしたり体位変換するなどは不可能で、誤嚥防止のために気管切開が施されているため発話も不可能である。飲食もできないため胃瘻を造設している。左手をわずかに動かすことができ、ゆっくりではあるが人差し指で文字盤の文字を指すことができる。問いかけに対して首を僅かに縦や横に振ることができるため、「はい」「いいえ」の意志表示ができる。発病後、本研究の論者であるインタビュアー(以下、インタビュアー)との文字盤によるコミュニケーションを実施するまでの5年間、作業療法士、医師、家族と文字盤を使った意思表示をしたことはほとんどなかったという。

在宅医療の医師、作業療法士、ソーシャルワーカーなどからデイサービスなどの通所施設へ通うことを勧められていたが拒否感が強い。1度だけ、気が進まないままにデイサービスに行ったが、妻とA氏は「お年寄りばかりの集まり。2度と行かない」と拒否を明確にしたという。妻が買い物などで外出するとき以外は、妻とA氏の二人で過ごす。作業療法士によるリハビリテーションと医師による訪問診療がそれぞれ週に1度行われている。

データの収集方法

在宅療養しているA氏との初回対面は、インタビュアーが、A氏を担当している作業療法士と共に自宅を訪れリハビリテーションの様子を観察した日であった。インタビューは、A氏の自宅にて作業療法士がリハビリテーションを実施し

ない日を選び、A氏の居室にある文字盤を使って、家族の陪席のもと、直接、A氏へのインタビューを行った。インタビューは、1週間に1回、計6回、それぞれの時間は、約10分を目安とした。

本研究の分析として用いる現象学的解釈は、その都度の両者間に起こった現象を捉え解釈するものであるため、インタビューは、構造化しない形式で進めた。あらかじめ質問は用意せず、インタビュアーとA氏との間に現れた雰囲気に対して自然に対応し、その都度、その場に展開される両者の言語活動をそのまま記述した。またインタビュアーとA氏との相互交流のなかで顕わとなったインタビュアーの間主観的な心的経験と妻の語りもあわせて記述した。

分析方法

データの記述における「」内はA氏が指で文字盤を指し示した語りで、＜＞内はインタビュアーの言葉である。（）は状況の説明とインタビュアーが感じたことを記述した。

得られた語りについて現象学的解釈による分析を行った。分析方法としてまずA氏の言葉に現れた経験について現象学的還元し、共通する形相(本質)を意味のまとまりごとにカテゴリーとして抽出した。さらに村田のスピリチュアルペインの3次元構造概念(村田, 2005)を参考にしてカテゴリー間の関連を現象学的解釈によって分析した。

倫理的配慮

この研究は京都大学大学院 人間・環境学研究科倫理委員会での承認を得たうえで行った。(承認番号:26-H-31)

結果については、学会、学会誌などに論文などの形で発表する可能性があること、その際、個人の名前が特定されるような表現は使用しないことなどを患者、家族に説明して同意書を得たうえで行った。なお、患者の同意は家族の仲介によって

行われた。

結果

I. 文字盤によるA氏の語りと様子

インタビューの導入

A氏の自宅は閑静な住宅街の一角にある新築の一戸建てで、玄関横の庭には梅が咲いている。A氏の妻の行き届いた手入れのほどがうかがえる。玄関を入るとすぐ右手にA氏が休んでいる部屋がある。A氏は南向きの明るい部屋で静かにベッドに横たわっていた。部屋に入るとラジオが流れている。作業療法士と居室に入ると作業療法士が、「今日はお願ひしていた佐藤さんといっしょに来ました。よろしくお願いしますね。」と言ってA氏にインタビュアーを紹介してくれた。妻は、少し緊張した表情であったが、世間話をしているうちにインタビュアーと打ち解けてきたように感じた。作業療法士によるリハビリテーションが始まると、妻は手慣れた様子で掛け布団を外す。作業療法士はベッドの上に上がり、A氏の体をゆっくり起こし、腕を動かす。次々とリハビリテーションは進められていく。その間、時折、作業療法士が「いやがってはるなあ」とつぶやきながら訓練していく。妻はその様子を傍らで見ている。ベッドから脚を下して立つ訓練が始まると、妻は、ルーティンワークをまるで自分の仕事であるかのように手慣れた様子で装具を準備し、装着にも手を貸す。作業療法士は「立てるようになったら、歩けるようにもなるかもしれないから」と励ましながら訓練を進めていく。「今日は、佐藤さんが来てはるから、ちょっと緊張してますね」というとA氏の顔色が少し赤らんだようにも見えた。最後は、A氏の口を開けるために頬の筋肉をマッサージし、声は出ないが口を「あいうえお」と開ける訓練をした。

一通りの訓練が終わったとき、インタビュアーはベッドのある部屋の隣の部屋(テレビヤソ

ファーがあるリビング)の片隅に、文字盤が雑誌の間に挟まれ仕舞い込まれていることに気がついた。作業療法士に「あの文字盤は使っていますか」と尋ねると、「いやー、使ったことないです」と答えた。妻にも生活の中で使用しているかどうか尋ねたが「使ったことありますけど、まどろっこしいから、途中で言いたいことがなんとなくわかったら、こちらから、こうなんやねという具合です。お父さんおしっこって聞けば、首を振るから、それでわかるし」とのことであった。

A氏が発病後、誤嚥を防止するために気管切開し発話できなくなってからの5年間、自分の気持ちを全く語っていなかったことを知ったインタビュアーは、作業療法士と患者、家族の同意を得た上で、リハビリテーションを実施しない日を選んで作業療法士を伴わずに、A氏の自宅を訪れて、文字盤によるインタビューを実施することにした。

インタビュー 1回目

(A氏に部屋の外から挨拶し入室した。部屋に入るとラジオが流れていた。白いレースのカーテン越しに心地よい適度な光が差し込む。) <今日は、Aさんとお話しをしたいと思いますので、よろしくお願いします>と軽く挨拶をかわした。

<今日は、Aさんのお気持ちを文字盤を使ってお話しいただきたいのですが、よろしいでしょうか。よろしくお願いします>(A氏の妻が文字盤をA氏の胸の上あたりにかざし、A氏の左手をふとんから出す。)

<リハビリはしんどいですか?>(A氏は、しばらく人差し指を宙に浮かせたまま、文字盤をじっと眺めている。文字を必死に探しているようだ。ようやく「あ」「る」と指した。イエスの答えは「ある」と返答するようだ。長く言葉や文字を使って他者に思いを伝えるという行為をしていなかったために「は・い」という言葉を思い出せないで困っ

ているようにも見えた。)

<リハビリを続けたいですか?>

「つづけたい」(文字を探すのに苦労している様子がわかった。文字は50音順の規則的な並びなのだが、一つ一つの文字を不規則に探しているのが指と目の動きで察することができた。)

<リハビリするのは、楽しいですか>

「たのしくない」(少しずつ、文字を指すのが速くなってきた。)

<なぜですか>

「いま、おちつきたい、ゆっくり、したい」

<リハビリするのは大切ですか>(A氏は首を横にふった。「いいえ」という意味である。)

<外に出たいですか>

「ない」(出たくないという単語を指していくのはめんどろと判断したのか、「ない」と省略する。)

<昔の友人と話したりしたいですか>

「ない」

<今、どんなことを考えていますか>

「むかしのこと」「しごと」「けいさつ、せいかつ あんぜんか」「たのしいことおもいだす」

「どうりょうのこと おもいだす」

<警察にお勤めだったのですね。昔の同僚と何かお話ししたいですか>

「とくにない」

<今、お話しているの、つらくないですか>

「ない」

<今、Aさんの希望はなんですか>

「はやく しにたい」(「はやく しに」まで指さしたところで、妻が「なんか、へんなこと言おうとしてるんちゃう」と介入してきたが、A氏は、臆せず「たい」と続けた。この言葉を一番言いたかったのか、迷うことなく、「はやく しにたい」と意思表示した。)

<はやく、死にたいと思っているのですね>(A氏の言葉を反復すると、A氏は、首を縦にしっかりふった。このインタビューの間、顔の表情は硬

直したままで、笑う、怒るなどの変化はない。10分を超えていたので、疲れが出てはいけないと案じたインタビュアーは「お疲れになるといけませんので、今日は終わりにしますね」と終了を告げた。）

（玄関先まで妻がインタビュアーを見送ってくれたが、その際、玄関の外にインタビュアーとともに出た。妻は「とうとう、あの言葉(死にたい)言った」とさびしそうにインタビュアーに伝えてきた。インタビュアーは、「あの言葉を一番言いたかったのだと思います。5年間、誰にも言えずに閉まってきました。誰かに死にたいほどの苦しみを伝え、誰かがそれを受け取った、その瞬間が、今日のこの時だったと思います」と答えた。家族は「死にたい」という言葉を最も聞きたくなかったのかもしれないが、「死にたい」を表出したことに大いなる意味があるとインタビュアーは感じ、どこか安堵している自分がいた。また「やはりそうだったか」と咄嗟に思ったインタビュアーは、患者の「死にたい」を先取りしていた自分に気づいた。「死にたい」という言葉を聞きたくなかった家族の思いとは裏腹にインタビュアーは「心の底に閉じ込めていた叫びを表出してほしかった」とどこかで期待していた。）

インタビュー 2回目

＜寝ているときに何か考えていますか＞

「かんがえてる」「じぶんのこと」「しんだときのこと」「かえってきたときのこと」

（「かえってきた」のがいつのことなのか、どこになのかについて聞くことができなかった。さらにA氏は続けて）「しにたい」「いきているのがつらい」

＜生きているのがつらいんですね。それは今の気持ちですか＞

「いま」

（「どこにかえってきた」のか「いつかえってきた」

ときのことなのか、大変興味をもったが、質問攻めにならないかと、及び腰になってしまったインタビュアーは、上のような重要な質問の機会を逃してしまった。）

＜息子さんに何か伝えたいことはありますか＞

「ない」

（本インタビューの前、妻と雑談をしている際、「息子がよく来てくれる、よく面倒みてくれる」という話をしていたので、息子との関係が本インタビュー当初から気になっており、息子との関係を聞きたかったインタビュアーがいた。また妻とA氏の二人だけの時間が長いことを作業療法士から聞いていたので、妻以外の他者との関係性について知りたかったためこの質問をした。また村田理論から、インタビュアーは関係性のスピリチュアルペインを瞬間的に想定した。もし、息子や妻に対して何等かのメッセージがあれば、そこからスピリチュアルケアにつながらないかと、この質問に切り替えたが、成功しなかった。）

＜奥さまに何か伝えたいことはありますか＞

「ない」

（妻が、昔の職場の先輩が見舞いに来たときの話しをする。）

＜先輩が来てくれたときは嬉しかったですか＞

「うれしい」

（外出は好まないが、家族以外の他者との関係性を全く遮断しているわけではないことを知った。）

インタビュー 3回目

（前回のインタビューで聴けなかった質問をした。）

＜先週、死んだときのことを考えるとおっしゃっていましたが、どんなことを考えているのですか＞

（答えない）

（難しい質問であったし、思い出すのにも時間を要したと察した。答えたくないのかもしれないことも想定し、執拗に問うことはやめた方がよいと

現場に漂う雰囲気から判断し、これ以上これについては質問しなかった。また「答えない」ということ自体になにかしらの負の感情があるかもしれないと間主観的に感じ取り「怒りはありますか」と聴いた。）

＜今、怒りはありますか＞

「からだがじゆうになる」(恐らく「からだが自由にならない」と言いたいのだろう。1回目のインタビューで、過去の仕事のことについて考えているようだったため、昔のアルバムをインタビュアーと妻とA氏の3人で見ることにした)

＜若いときの写真を見てどう思いますか＞

「なにも かんじない」

＜警察官の写真、素敵ですね＞

「かしこくない」

＜写真を見ると当時のことを思い出しますか＞

「おもいだす」(飼っていたフェレットの写真が出て来たので)

＜名前覚えていますか＞

「おぼえてない」「あしたにしたい」

(アルバムを見ること自体が苦痛であるような表情をインタビュアーが感じ取ったためアルバムを見ながら写真について聞くのは中止した。)

＜リハビリするのは大切ですか＞

(A氏は首を横にふり、「いいえ」を示唆する。)

＜リハビリは必要ですか＞

(A氏、首を横にふる)

＜リハビリ続けますか＞

(A氏、首を縦にふる)

＜なぜですか＞

「いろんなことをしていくことが、なにをするのにもたいせつだ」

＜それは生きていくためですか＞

(A氏、首を縦にふる)

＜奥様がよくしてくださって幸せですね＞

(A氏、首を縦にふる)

＜奥様が買い物に出かけて、ひとりのときはどう

ですか＞

「しにたい」

＜では、奥様がいてうれしいのですね＞

(A氏、首を2回、これまでより大きなアクションと早い動きで横にふる)

＜外に出てみたくないですか＞

「ない」

インタビュー 4回目

＜私たちもみんないつか死ぬのですが、死んだらどうなると思いますか＞

「おほかにはいる」

＜次の世界があると思いますか＞

「ない」「ない」「なにもない」「いしきはない」「ゼロになる」

＜それは残念なことですか＞

「しかたない」

＜それでも死にたいですか＞

「いい」(「死にたい」の意)

＜何度か死にたいとおっしゃいましたが、いつからそう思っていましたか＞

「しぬきかいをしったとき」(死ぬことを知ったときという意味であろう。)

＜病気されたときですか＞

(A氏、首を縦にふる)

＜それまでは考えたことなかったですか＞

(A氏、首を縦にふる)

インタビュー 5回目

＜リハビリはAさんにとってどんな意味をもっていますか＞

「ない」

＜なぜ、リハビリをがんばれるのですか＞

「りはびり がんばるのはじぶんのため」「いがいせい(意外性)がある」

＜どういうことですか＞

「とんだことがある」

＜小さな変化があるということですか＞

(A 氏, 首を縦にふる)

＜リハビリに希望が見えますか＞

「ない」

＜今の生活についてどう思われますか＞

「つらい」

＜生きるとはどういうことだと思いますか＞

「いきないと じぶんをにんげんとしておもえない」

＜自分の存在についてどう思いますか＞

「いきている」

インタビュー 6 回目

＜歩けるようになりたいですか＞

(A 氏, 首を縦にふる)

＜歩いている自分をイメージできますか＞

(A 氏, 首を横にふる) 続けて, 文字盤を指さし「わからない」

＜リハビリに意欲ないですか＞

「わからない」「しんどい」

(妻の語り「どんなに誘っても外にいきたがらないんですよ。」「いつも怒っているんです」)

Ⅱ. 抽出した7つのカテゴリー

A 氏の語りを7つのカテゴリーに分類した。各カテゴリーにはそれを導出した A 氏の言葉を「 」に記した。インタビュアーの質問内容から推察した A 氏の意図を()内に付加した。

①動けなさ

「からだがじゆうになる(自由にならない)」, 「(歩いている自分を)イメージできない」, (歩けるようになりたいですかの問いに) 首を縦に振る

②希望の無さ

「(リハビリは) たのしくない」「(リハビリは意味がない)」「しんどい」「(リハビリに希望は)ない」

③不自由になる前の自己の表象

「おもいだす」「むかしのこと」「しごと」「けいさ

つ, せいかつあんぜんか」「たのしいことおもいだす」「どうりょうのこと おもいだす」「(若いときの写真を見て) なにも かんじない」「(飼っていたフェレットの名前は) おぼえてない」「あしたにしたい」

④世間との没交渉

「(外に出たく) ない」「(友人と話したりしたく) ない」「(昔の同僚と何か話したいことは) とくにない」

⑤死

「(今の生活は) つらい」「(寝ているときに考えていることは) じぶんのこと, しんだときのこと, かえってきたときのこと」「しにたい」「いきているのがつらい」「(死んだら) おほかにはいる, (次の世界は) ない, ゼロになる, しかたがない, (それでも) いい」「(病気になったとき) しにたい(と考えた)」

⑥リハビリテーションの意味

「(リハビリを) つづけたい」「りはびり がんばるのはじぶんのため」「いがいせいがある」「とんだことがある」

⑦生きる意味

「いきないと じぶんをにんげんとしておもえない」「いきている」「(生きていくためには) いろんなことをしていくことが, なにをするのにもたいせつだ」

考察

A 氏の語りから抽出された7つのカテゴリー(①～⑦)をもとに A 氏のスピリチュアルペインとリハビリテーションがスピリチュアルケアとして成立するかどうかについて現象学を手掛かりに考察する。

I .A 氏のスピリチュアルペイン

A 氏は, 話せない, 食べられない, 動けないという状況のなかで, 胃瘻から液体の食物を注入され, 天井を見つめたままベッドに横たわって, 何

もしやべらず1日のほとんどを過ごす。このような事態を生きるA氏は、「し(死)にたい」「い(生)きているのがつらい」と生きる意味の喪失を思わせるスピリチュアルペインを伝えてきた。では、A氏のスピリチュアルペインはいかなる構造をもっているのだろうか。

村田(2005)はスピリチュアルペインを人間存在のあり方である時間存在、関係存在、自律存在の3次元から捉える。時間存在である人間のスピリチュアルペインとは、将来を失った患者には現在の生の意味が成立しないため、現在の自己の生が無意味、無目的、不条理として現出して生じるものであるとする(時間性スピリチュアルペイン)。関係存在である人間のスピリチュアルペインとは、死の接近によって他者と世界との関係の断絶を想い、自己の存在と生の意味を失うことで、虚無、孤独と不安、生の無意味のなかで強いられる苦しみであるという(関係性スピリチュアルペイン)。また自律存在からのスピリチュアルペインの説明として、「できなくなる」という体験によって他者への依存を余儀なくされ、自立できない、生産性がないことによる現在の生に対する無意味、無価値が現出することによるものであるとする(自律性スピリチュアルペイン)。

村田の3次元で捉えるスピリチュアルペインの定義と現象学を手掛かりに①～⑦のカテゴリーを(1)リハビリテーションへの否定的態度にみえる自律性、時間性スピリチュアルペイン(2)世間との没交渉の態度からみえる時間性と関係性のスピリチュアルペインの2つの視座から論考する。村田の3次元分類は、開発当初スピリチュアルペインを分類することで、その構造を解明しようとするものであった。しかし1つの言葉や苦悩を1次元で捉え分類することには無理があり3次元が複雑に交錯していると思われる。したがって本論では、ある1つの事象も視座を変えることで別次元からも捉えることができると考え、1次元で捉え

ることにこだわらずに分析することを試みた。

(1) リハビリテーションへの否定的態度にみえる

自律性、時間性スピリチュアルペイン

身動きが取れない閉塞された世界に生きている苦しみを表出した「からだがじゆうになる」「(歩いている自分を)イメージできない」(①動けなさ)、これらの言葉は自律性のスピリチュアルペインの表出であろう。体が自由にならないし、将来的に歩いている自分をイメージできないつらさは、自律性を奪われた苦しみのなかにある自律性スピリチュアルペインであり、しかも「(今の生活は)つらい」「いきているのがつらい」(⑤死)、「(リハビリは)たのしくない」「(リハビリは意味がない)」「しんどい」「(リハビリに希望は)ない」(②希望の無さ)から、将来に対して建設的に自分をイメージできない時間性のスピリチュアルペインでもあると考える。

1回目のインタビューで過去のA氏の職場への追想が見られたため、3回目のインタビューで、古いアルバムを持ち出して追想を試みたが、健康であったころの過去の自分を刹那に振り返ることはあっても、「(若いときの写真を見て)なにもかんじない」「おぼえてない」「あしたにしたい」(③過去)と、視覚的な回想を味わうことすら苦痛である様子であった。写真という切り取られた過去は、今の状態とのギャップを顕在化し、思い出すのがつらい場面があるようにインタビューーには感じられた。

過去からの連続のなかに生きていることを自明としている我々の見落としがここにある。すなわち、健康で思うような動きをしながら希望をもって生きている人は、過去からの連続性を無意識的に感じつつ将来をまなざして生きるが、将来への希望の無さ、現在の無意味さのなかを生きている人は、過去を切り離し、自らのその所有をも捨てるかのようなふるまいをする、そのことへの無理

解、見落としである。

A氏は、時間の流れから切断され、切り取られた「今、ここだけ」という世界に生きていた。将来を展望できない時間性のスピリチュアルペインにおいては、刹那的に記憶の断片を楽しむことがあったとしても、記憶は、過去の経験の残渣となり、よそよそしくA氏に現れるのであり、A氏の現在の無意味さを補填するものにはなりえないし、それどころか現在の無意味さを突きつけるものとなるのではないだろうか。

本論冒頭で紹介したスピリチュアルケアは、過去の生活や人生そのものを振り返り、それらを肯定しながら自己の存在や意味を肯定していく作業を中心とするものである。しかし、本事例は、そのような回想作業が果たしてケアになりえるかどうかを再考する必要性を示唆するものとなった。本研究は、人生の回想によって今を生きる意味を回復できるとするスピリチュアルケアの根本思想を図らずも問い直す契機となった。

また、将来への希望がない今、リハビリテーションの意味を見出すことができず、苦しい訓練に対して意欲が削がれるのは当然であろう。人間は、ある望まぬ状況から希望する新しい状況に向かおうとするとき、意欲に突き動かされる（佐藤,2011）。その努力がたとえ苦しいものであっても。しかし、希望する新しい状況が実現不可能なものであったとしたら、その努力のための意欲は発動しない。「(リハビリは)たのしくない」「(リハビリは意味が)ない」「しんどい」「(リハビリに希望は)ない」(②希望の無さ)などの表現は、A氏の立ち上がらない意欲を傍証するものである。

(2) 世間との没交渉的態度からみえる時間性と関係性のスピリチュアルペイン

「(外に出たく)ない」「(友人と話したりしたくない)」「(昔の同僚と何か話したいことは)とくはない」とはどのような体験なのであろうか。時間

性と関係性のスピリチュアルペインを胚胎したA氏が生きている世界をフッサール、ビンスワナー、ハイデガーの記述を手掛かりに考察する。

人は空間的にまた時間的に立ち位置を変えながら、そしてまなざしをあちこちに向け変えることによって絶えず新しさに出会っていく。その際、新しさへの憧れは常に人の経験に随伴しているだろう。そのような新しさを控え持った世界は、過去と未来という2つの地平をもった「手の届く向こう」(フッサール1950)に存在するものとして現前化し、現前化した世界との関係性のなかにこそ我々は自らの存在を確信するのである。そして、新しさに導かれる能動的な「外に出る」などの動きには、「意志」と「行為」がかかわっている。フッサール(1988)は、意志の特徴として「過去のことにではなく未来のことに向かう」を挙げ、また「私がそれを意志するから、それは存在するようになる」という。さらに榊原(2012)は、「未来の『それ』が何らかの仕方で先取りされ、先取りされた『それ』が意志されることで、当の『それ』が実際に現実化していくのである」、「先取りされた『それ』が現実化して存在するようになるのは、行為しつつ意志することであるとする」とフッサールの不十分さを補完する。ここで、「意志」と「行為」には「過去」と「未来」が深く関わっていることに注意したい。未来という地平があからさまに閉ざされていると感じている人にとって、未来地平を含有している意志を随伴した行為に積極性は存在するのだろうか。

「(外に出たく)ない」「(友人と話したりしたくない)」「(昔の同僚と何か話したいことは)とくはない」といった体験は、単純には関係性のスピリチュアルペインであると判断されるが、時間性にもかかわるものであると考える。「絶えず、新しく多少とも明瞭でまた内容豊かな諸知覚や準現前化を、自ら作り出すことができるし、或いは多少とも明瞭なもろもろの像を自ら作り出すことが

できる」(Husserl,1950)我々は、少なくとも未来という地平を自明的に前提している。したがって「今、ここ」に閉塞された生活で、「次なる」時間性を内包する「新しい」環境との出会いへの要求は、生起可能なのであろうかという疑問が起る。

「生活世界の中に次なるものは登場しなくてよい」つまり「次なる」という「新しさ」を控えもつ可能存在としての投げ出しは、ここでは退けられてしまっているのである。友人と話すことや外の環境との接触が、意志と行為によって「次なる」時間や空間に出会い、生活世界を更新していくことであるならば、A氏には、「次なる」という未来への羨望は、もはや生じず、外の環境への踏み出し、他者との関係性の構築は躊躇されると考えられる。この「次なる」との出会いの不必要さは、A氏の「早く死にたい」という自己の生の無意味さを引き寄せる。

ここでハイデガーの言説を手掛かりに、「早く死にたい」と表現されるA氏の体験世界の分析を行う。

ハイデガーは「現存在は、じぶんによって本質によって帰属している情態性にもとづいて或る存在のしかたを有しており、その存在のしかたのなかで現存在はじぶん自身のまえにもたらされ、じぶんの被投性にあってみずから開示されるのである。被投性とはたほう或る存在者の存在のしかたなのであって、その存在者はそのつどじぶんのさまざまな可能性そのものであり、しかも当の存在者はそれらの可能性において、またその可能性からじぶんを理解している（その可能性へとみずからを投企する）のだ。」(Heidegger,1927)という。現存在は世界内存在として被投され（世界に投げ出され）、そして可能存在として自らを投企しながら生きている。しかし、A氏においては、投げ出された世界の内で「次なる」可能性への企ては生起しない。時間的、空間的に閉塞された事態においては、流れをもつ生き生きとした現在が立ち上

がってこない。つまり生が無意味化するのである。無意味となった生を生きることの不条理さへの痛みこそが、スピリチュアルペインであるといってもよいだろう。

人は日常、「生の意味があるのか」という唐突な疑問を自らに呈することはない。しかし、「動く」「話す」「食べる」といった自明性（当たり前さ）を欠いた生活のなかでは、「生きる意味はあるのか」といった存在論的な問いが立ち上がってしまうのである。当然、その答えはどこにも準備されていないのであり、生の意味を問う契機のなかで問いの終息点が見えないまま「早く死にたい」という着地点に舞い降りる。やはりここでも「次なる」という時間の広がり「生きる意味」問題の前に横たわっている。

次にビンスワンガーの「人間学的均衡」(Binswanger,1956)の概念を手掛かりに、事態の動かなさを生きるA氏の「外に出たくない」「友人に会いたくない」という世間との没交渉にみえる関係性スピリチュアルペインについて考えてみたい。

ビンスワンガーは、現存在の存在様式について縦と横の2次元で説明している。他者との関係性や世界との関係に顕示されるような横の広がり、自らをより高みへと押し上げたい縦の広がり、つまり高さの均衡がとれた状態を「人間学的均衡」(anthropologische Proportion)と名付ける。横方向の広がり、縦方向の高さの不均衡は、現存在がある特定の経験のなかで嵌まり込んでしまい、出発することがもはやできない事態であり、現存在はその経験の地平を拡大できなくなり、限局された立場で立ち止まってしまうことを意味する。この不均衡によって動けなくなり、迷い込んでしまう状態になるという。

A氏は、身体を自らの意思で動かすこともできず、いくばくかの高みを目指すことすら奪われた状況に投げ込まれ、世間、他者との交渉を自らの

意思で拒否する。このことをビンスワンガーの「人間学的均衡」の言説から解釈すると、縦の広がり、の不可能性のなかで、横への広がり、を拒否する A 氏の態度は「人間学的均衡」を守るための戦略であるとも考えられる。もし、リハビリテーションによって、改善されていくという可能性のなかに生きていたとしたら、高みをめざす自己を許すことができる。ならば「人間学的均衡」を保つために、横の広がり、つまり、他者との交渉もその背景に用意されていたかもしれない。しかし「どうにもならなさ」「どうしようもなさ」「事態の動かなさ」は、事態への嵌まり込みを生んでしまい、「人間学的均衡」を保つために、A 氏は他者との交渉を断ったのである。つまり縦方向の可能性が断たれた状態では、人間学的均衡を保つためには、横方向の広がりも断たざるをえなかったのである。もし、リハビリテーションによる身体的回復の方向に向かわない現実を補うように、横方向つまり世間との交渉を広げたとしても、そこに発生する「人間学的不均衡」は、縦方向の広がり（身体的回復の不可能）を顕わにするだけで、今を生きる戦略にはなりえない。A 氏が選んだ世間との没交渉は、今を生きる術であったと解釈する。A 氏の横方向の広がりへの拒否は、広がらない縦方向とのバランスを取るためであり「人間学的均衡」を保持するための精一杯の戦略であったと解する。周囲の医療者が「デイサービスに行きましょう、外に出しましょう」と再三介入するが、それを拒否し、他者との関係性は妻との間にのみ保持しようとする A 氏の態度に、周囲は批判的で A 氏のあり方は理解されないままであるが、ビンスワンガーの「人間学的均衡」の視座からは了解可能である。「外に出たくない」「友人に会いたくない」といった世間との没交渉は、他者との関係性のなかにしか生きられないという現存在のあり方の瓦解ではあるが、「どうにもならなさ」を生きる術でもあり、そ

のような生きる術は、さらに深く分け入れれば生きる意味の無さを胚胎するスピリチュアルペインに突きあたる。

また、息子との関係性がケアに繋がらないかという筆者の目論見が失敗に終わった理由もビンスワンガーの人間学的均衡によって説明が可能である。

これまで関係性のスピリチュアルペインに対しては、周囲との関係性の再構築や深まりがケアにつながるとされてきたが、その言説に普遍的妥当性が確保されているのかを再考する必要性が浮かび上がってきた。

以上から A 氏は、時間性、自律性、関係性が複雑に絡み合いながら、生きる意味を主題としたスピリチュアルペインのなかを生きていたと推察される。

Ⅱ．スピリチュアルケアとしてのリハビリテーション

「(生きていくためには)いろんなことをしていくことが、なにをするのにもたいせつだ」(⑦生きる意味)と表現した A 氏は、比較的長い文に挑戦し、インタビュアーに伝えてきた。この表現を得た状況を再度、振り返る。＜リハビリするのは大切ですか＞の問いに対し A 氏は首を横にふって「いいえ」と答える。さらに＜リハビリは必要ですか＞についても A 氏は首を横にふり、「いいえ」と反応したが、後に続く＜リハビリ続けますか＞の問いに、初めて首を縦にふり、「はい」と応答した。そこでインタビュアーは、＜なぜですか＞と尋ねると「いろんなことをしていくことが、なにをするのにもたいせつだ」という答えであった。＜それは生きていくためですか＞と問うと A 氏は首を縦にふり、「はい」と答えた。この一連の応答は何を意味しているのだろうか。リハビリテーションを積極的にやりたいわけではないことは明らかである。作業療法士も、何度か「A さん、リハビリしたくないひとなんです」とインタビュ

アーに伝えてきた。家族もそのことを感じているようで、「機嫌が悪いときは、病院に電話して今日はやめときますって連絡するんです」と言っていた。周囲も気づいているリハビリテーションへの拒否がある。しかし文字盤による A 氏の意思表示によって、リハビリテーションに積極的ではないが、続けたいと思っていることがわかった。リハビリテーションへの拒否とリハビリテーションを続ける意思はどのような連関があるのか。なぜ積極的にやりたいわけではないが、続けたいのだろうか。

「(リハビリは) たのしくない」「(リハビリは意味が) ない」「しんどい」「(リハビリに希望は) ない」(②希望の無さ) といったリハビリテーションへの消極的態度と、「(リハビリを) つづけたい」「りはびり ががんばるのはじぶんのため」「いがいせいがある」「とんだことがある」(⑥リハビリテーションの意味)「いきないと じぶんをにんげんとしておもえない」「いきている」「(生きていくためには) いろんなことをしていくことが、なにをするのにもたいせつだ」(⑦生きる意味) などのリハビリテーションへの積極的な態度の矛盾を解釈することで、リハビリテーションが A 氏にとってスピリチュアルケアとして機能しているのかどうかについて (1) 相貌のなかの偏差 (2) 被投性、可能存在、本来の現存在という 2 つの論点から考察する。

(1) 相貌のなかの偏差 (「いがいせいがある」「とんだことがある」)

リハビリテーションに対する A 氏の注目すべき突出した言葉である「いがいせいがある」「とんだことがある」について考える。

新田 (1992) は、意識は「～へ向かっている」という顕在性の様態をとるが、逆の非顕在性の様態にも相互移行する可能性をフッサールが指摘していることを述べる。非顕在性は顕在性に取り囲まれているのであり、志向性によって意識が流動的で

ある所以である。また鷺田 (2006) は「われわれの注意を喚起するもの、それはあるなじまれた世界の相貌からのずれである。」という。A 氏にすでにある「やりたくなさ」は A 氏自身の内面の相貌としてある。そこに、ある偏差をもった自己の現れがあったと理解できる。「経験の領野が意味を通して主題的に分節され、その分節を主題的に確定ないしは改定していくためにさまざまな偏差にたえず注意を移行していくといった事態は、ある静止的な状態としてではなく、みずからを揺さぶりながら確定していく、あるいは逆に確定しながら揺さぶり続けていくようなひとつの運動として捉えなければならぬだろう。」と鷺田は続ける。A 氏は、自己の内面に鎮座する「やりたくない」の周辺をうろつく偏差 (「いがいせいがある」「とんだことがある」) に刹那に絡め取られたと思われる。受動的に動かされている四肢の動きのなかに僅かな能動性を感じ取ったのかもしれない。「いがいせいがある」「とんだことがある」というささやかな驚きは、リハビリテーションを続けたい A 氏を支えるものである。

死にたいという絶望感と、どうせ死なせてもらえないのであれば、どうあるのか、というぎりぎりの線上を孤独に歩く A 氏のありようがここに浮かび上がる。

ハイデガー (1927) は『存在と時間』のなかで、「死」と「存在の可能性」について以下のようにいう。「現存在はむしろ不断に、それが存在しているかぎり、すでにじぶんの＜なお～ない＞である。それとおなじように現存在はまた、すでにつねにみずからのおわりなのである。死がおわることを意味するとして、そのおわることは、現存在がおわりに達していることを意味するのではない。むしろ現存在という存在者がおわりへとかわって存在していることを意味している。」ハイデガー (1927) は、ひとは、日常的に死を遠ざけ、それを取り込むことなく頹落した生き方をしているとい

う。もちろん頹落という言葉は否定的に用いているわけではない。一方、死へとかわる現存在は、まさに本来の実存論的ありかたを生きているのであるとする。すなわち死へとかわるあり方は、本来のありかたを取り返した現存在なのである。A氏の場合、すでに死の相から世界をまなざし、自らを世界内存在として周囲世界をみている。将来へ向けて、自己のあり方を企て、可能存在として投企するという仕方ではなく、死へとかわる本来の現存在として、リハビリテーションの実践のなかに現れてくる自己をながめ「いがいせいがある」「とんだことがある」ことに驚く。この驚きは、「動く」「話す」ことを自明として自然的態度で生きる人々のあり方と乖離がある。自己の身体に起こっている事柄を一旦カッコ入れし俯瞰してながめているとはいえないだろうか。そして＜なごない＞自己への覚知を驚きとともに味わうのである。この味わい深い驚きは、リハビリテーションの実践によって現れてくるものであることを思うと、A氏にとってのリハビリテーションは反省的契機としての意味を持っていると考えられる。この＜なごない＞というあり方は、潜在的に将来という時間を胚胎しているのであるから、止まってしまった「今」を振り切っても＜なごない＞自己を前方へ疾駆させる実践としてのリハビリテーションの意味がA氏の倦怠感に随伴して現れているとはいえないだろうか。リハビリテーションによって回復することがないとしても、それを実践することそのものの意味をここにくみ取ることができる。本例で顕在化された終末期リハビリテーションの意味は医療者を後押しする一助となるかもしれない。ケアの本質的な意味のさらなる模索を今後の課題としたい。

(2) 被投性、可能存在、本来の現存在（「いろんなことをしていく」）

ここで「いろんなことをしていく」（⑦生きる意

味）という言葉に注目したい。ハイデガー（1927）は、「現存在は、じぶんに本質によって帰属している情態性にもとづいて或る存在のしかたを有しており、その存在のしかたのなかで現存在はじぶん自身のまえにもたらされ、じぶんの被投性にあってみずからに開示されるのである。被投性とはたほう或る存在者の存在のしかたなのであって、その存在者はそのつどじぶんの可能性そのものであり、しかも当の存在者はそれらの可能性において、またその可能性からじぶんを理解している（その可能性へとみずからを投企する）のだ」という。現存在は、自分のあり方を自分が投げ出された事態のなかにみるのであり、しかも、自分の可能性のなかにそれをみるのであるし、さらにその可能性に自身を投げ出していく。したがって「いろんなことをしていく」というA氏の言葉は、現存在のあり方そのものを言い当てているのである。リハビリテーションの必要性や重要性など医療側からあてがわれた理論は、ここでは意味はなく、なにかをする、続けるという情態性に現存在の存在そのものが顕わになっているのである。リハビリテーションは苦しい作業であり、やりたいかと問われれば、やりたくないと答えるのは当然のことである。ここで見落としてはならないのが、生きていくために続けるという意思に潜在する現存在のありようである。

ハイデガーの「被投性」と前述のビンズワナー（1956）の「人間学的均衡」から、いかなる事態においても、存在可能性に投げ出していく縦、横方向への生の駆動力は潜伏しており、どうにもならなさによって抑圧されたその力は、時折、粗雑な仕方でその姿を現すのである。つまり自力での身動きがとれない状態のなかでも、「いろんなことをしていく」という縦方向の潜在的な生の駆動力が、リハビリテーションに生きる意味を求めているのかもしれない。また、縦方向への積極的な駆動力は、その様態を曖昧なままに静かに「生

きる」を支えているのである。

「いろんなことをしていく」という投企が無意識的に生きる意味を再興するものであることを期待するならば、リハビリテーションがスピリチュアルケアとしての役割を持つ可能性を否定できない。ただ「次なる」に象徴される時間的広がり、断絶が、患者のスピリチュアルペインの中心的課題にあることをどのように克服していくのかが今後の課題として残されている。

Ⅲ. 文字盤による表出について（言語化の意味）

文字盤を使って患者自身の表象を表出したことの意義についてメルロー＝ポンティの言説を参考に考察する。メルロー＝ポンティ（1945）は『知覚の現象学』において次のことを指摘する。「意味をば、語がもっているわけではなく、所有しているわけでもなく、意味をもっているのは思惟の方であって、語の方は一つの空虚な外皮にとどまっているのだ」、「どうして思惟する主体自身も、彼が自分に対してははっきりと定式化するかあるいは口にしたり書いたりさえしないうちは、自分の思いに対して一種の無智の状態にとどまることになるか、こうしたことが解らなくなってしまうだろう」、「何としても語や言葉は、対象または思惟を指示する一つの仕方であることをやめて、それ自体、この思惟の感性的世界への現前とならねばならない。思惟の着物ではなくて、思惟の徴表または思惟の身体とならねばならない」。つまり、言語表現は、主体の経験を後追いしながらつぶさに表現するものではなく、また表現が事柄や思惟を的中することもない。むしろ言語表現によって主体の思惟が構成されとも考えられる。言語表現は、すなわち思惟そのもののなのである。したがってA氏は、文字盤の文字を1つ1つ、指し示しつつ、まさにその瞬間に思惟を思惟しているのではないだろうか。気管切開した後の5年あまりの間、誰にも何も語らず、内的世界に閉塞されていたA

氏の経験は、語りとともに思惟され経験へと押し上げられた。A氏の語りによって、A氏の内面にどのような変化があったかはわからない。しかし、リハビリテーションを続けたいと明言したことは、作業療法士にとって驚くべきことであったことを思うと、「つづけたい」という意思表示は、語りによって初めてA氏のなかに生じたとも考えられる。

家族にとってつらい言葉であったかもしれないが「死にたい」という発言は、「死にたい」ほどの経験を思惟に押し上げた。このことが、A氏にとってケアになったかどうかは定かではないが、5年あまりの時間のなかで自らの表象を他者との間に置くことなく、誰一人として、その思いを受けとらなかったことを思うと、自己の内面に向かうだけの「死にたい」という意識が、「死にたい」という言葉とともに、外（世界）に開かれた自己を惹起させたことにならないだろうか。A氏の思いは他者なる実存に確かに取り込まれ、またA氏の経験は間主観的経験となって収斂されたと感じる。さらに過去、現在、未来という時間軸が生起された語りから、断片的でしかなかったであろう表象の言語化は、過去、現在、未来の紐帯としての役割を果たしたと考えられる。文字盤によるコミュニケーションは、閉塞された主体に思惟作用を与え、断片的な表象にわずかながらつながりをもたせ、ぼんやりとした輪郭を与える契機となっていたと考える。

本研究の反省点と課題

文字盤を発見したことを契機として、長年にわたって言語的に外界から閉ざされたA氏の経験世界にアプローチすることを早急な課題として本研究を開始した。構造化しないインタビューは、その場の雰囲気やA氏の心的状況を間主観的に感じ取ることで進めるため、前質問とのつながりの無さが生じた。A氏の置かれた厳しい状況の

なかでインタビュアー自身の動揺もあり、A氏を問い詰めることがないよう、また必要以上に深追いすることがないようにと配慮したが、それによって読者が質問の流れや文脈を把握がしづらい結果となったことは反省すべき点である。具体的にはインタビュアーが唐突に息子の話題を持ち出す場面である。その時のインタビュアーの心理を内省すると、これまでスピリチュアルケアは関係性によってなされると承知してきたため、家族関係にケアの端緒を求めようとしてしまった。しかし、関係性によるケアが周知の概念であろうと、ケアを先取りすることは対象者の経験を捉えるためのインタビューにおいては失敗を招く。さらに関係性にケアの方向性を求めることの危うさも本論の考察で明らかとなったことを鑑みれば、既成概念にとらわれたケアの先取りは常に危険を孕んでいることが示唆された。そこにある事象をそのままに捉える直観こそが現象学的アプローチに不可欠であると再確認する契機となった。

また経験世界を解釈するには、現象学的解釈が最も相応しいと考え、本研究では現象学者の言説も援用しながら解釈をおこなったが、現象学的質的研究の方法論は研究者によってそれぞれ特徴がある。したがって一般化可能な方法論確立へ向けた努力が、現象学的質的研究に取り組む者の課題として残されている。

謝 辞

本研究の実践にあたり多大なるご協力いただきました京都市くまのクリニックの神野君夫院長ならびに津山努先生、現象学的考察についてご助言をいただきました兵庫医療大学共通教育センター紀平知樹教授に心より厚くお礼申し上げます。

文 献

- Ando, M., Tsuda, A., Morita T (2007) . Life review interviews on the spiritual well-being of terminally ill cancer patients. Support Care Cancer 16, 225-231.
- Binswanger, Ludwig (1956) . Drei Formen missglückten Daseins Verstiegenheit Verschrobenheit Manieriertheit. (宮本忠雄 (監訳) (1995) . L. ビンスワンガー 思い上がり ひねくれ わざとらしさ みすず書房)
- Chochinov Harey Max, Hack Thomas, Hassard Thomas, et al (2005) . Dignity therapy: a novel psychotherapeutic intervention for patients near the end of life. Journal Clinical Oncology 23, 5520-5525.
- Heidegger, Martin (1927) . Sein und zeit. Germany : Max Niemeyer (熊野純彦 (訳) (2013) . 存在と時間 (1) 岩波書店) pp154-155, 264-294, 349.
- Heidegger, Martin (1927) . Sein und zeit. Germany : Max Niemeyer (熊野純彦 (訳) (2013) . 存在と時間 (2) 岩波書店) pp342.
- Husserl, Edmund (1950) . Ideen : : Zu Einer Reinen Phanomenologie und Phanomenologischen Philosophie. (渡辺二郎 (訳) (1979) . イデーネン I -1 みすず書房)
- Husserl, Edmund (1950) . Ideen : Zu Einer Reinen Phanomenologie und Phanomenologischen Philosophie. (渡辺二郎 (訳) (1979) イデーネン I -2 みすず書房)
- Husserl, Edmund (1988) . Vorlesungen über Ethik und Wertlehre (1908-1914) , herausgegeben von Ullrich Melle, Husserliana Bd. XXVIII, Kluwer Academic Publishers (= XXVIII)
- 松葉祥一 (2011) . 開かれた現象学的研究方法 看護研究, 44巻, 1号, 17-26.
- Merleau-Ponty, Maurice (1945) . Phenomenologie

- de la Perception. Paris: Editions Gallimard (中島盛夫(訳)(2009). 知覚の現象学 法政大学出版局) pp290 - 299,306,308,576.
- 村田久行(2005). 終末期患者のスピリチュアルペインとそのケアー現象学的アプローチにによる解明ー 緩和ケア,15 - 5,385 - 390.
- 新田義弘(1992). 現象学とは何か 講談社学術文庫 pp51 - 54.
- 榊原哲也(2012). ケアの志向性ーフッサールからのアプローチー 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集, 31,18 - 37.
- 佐藤泰子(2011). 苦しみと緩和の臨床人間学ー聴くこと, 語ることの本当の意味ー 晃洋書房
- 鷲田清一(2006). 現象学の視線ー分散する理性ー 講談社学術文庫 pp8,54,55.